

区分	指導	題名	キュウリべと病急増初期のジメトモルフ水和剤散布は発病増加を抑制できる			
〔要約〕 キュウリべと病の急増初期にジメトモルフ水和剤を散布すると、その後のべと病の発病増加を抑制できる。						
キーワード	きゅうり	べと病	薬剤	抑制	病害虫部 病理昆虫研究室	

1. 背景とねらい

露地きゅうり栽培においてべと病は重要な病害である。本県では例年6月下旬に初発がみられ、7月中旬に急増するが、この間にオキサジキシル・銅水和剤を使用する。通常、その後のTPN水和剤散布で防除できるが、適期を逃した場合などにはこの時点の取りこぼしが8月下旬以降の被害につながる場合が多い。そこで薬剤によるべと病発生後急増期における病勢進展抑制効果を検討したところ、急増初期におけるジメトモルフ水和剤の茎葉散布が有効であることがわかったので、その成果を取りまとめる。

2. 成果の内容

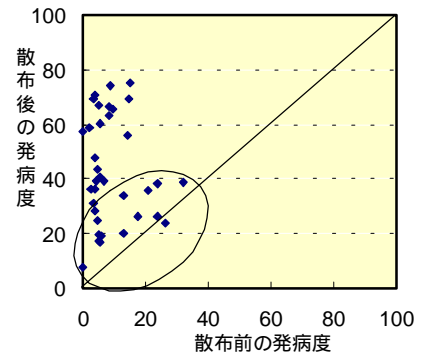
(1) 薬剤散布時期 ベと病の急増初期で、中位葉に発病が見え始める時期(発病葉率:概ね 25~30%)

(2) 使用する薬剤および使用方法

一般名	商品名	使用倍率	散布量	留意点
ジメトモルフ水和剤	フェスティバル水和剤	2,000倍	500L / 10a	アーチ両面から、葉の表裏に薬剤を丁寧に散布する
ジメトモルフ銅水和剤	フェスティバルC水和剤	800倍		

(3) 散布による効果 本剤散布により、1週間後の発病増加を抑制できる(散布時点での発病程度に抑制)。

: 右図において、散布前後の発病程度のプロットが丸で囲んだ付近にあれば発病増加が抑制されたと判断する(右図で囲み内はジメトモルフ処理区、囲み外は無散布の場合)。



3. 成果活用上の留意事項

- (1) キュウリべと病の急増期は概ね県南部7月第4~5半旬、県央・北部同第5~6半旬であるが、本成果の活用においてはこの時期に限らず、べと病の増加が中位葉に見え始める頃に本剤散布を行うことがポイントである。
- (2) ジメトモルフ剤はべと病の増加初期に使用するための補完散布剤とし、定期散布剤としない。
- (3) ジメトモルフ剤耐性のべと病菌は現在まで確認できていないが、耐性菌出現を回避するため、連用しない。
- (4) 定期散布剤には異系統のオキサジキシル銅水和剤などを選択する。

4. 成果の活用方法等

- (1) 適用地帯または対象者等 県下全域
- (2) 期待する活用効果 ベと病の蔓延による早期枯れ上りを回避できる。

5. 当該事項にかかる試験研究課題

(730) きゅうりにおける総合的病害防除技術の確立(平成13~15年、国・県)

6. 参考資料・文献

- (1) 平成13、14年度病理昆虫研究室成績書(未定稿)

7. 試験成績の概要

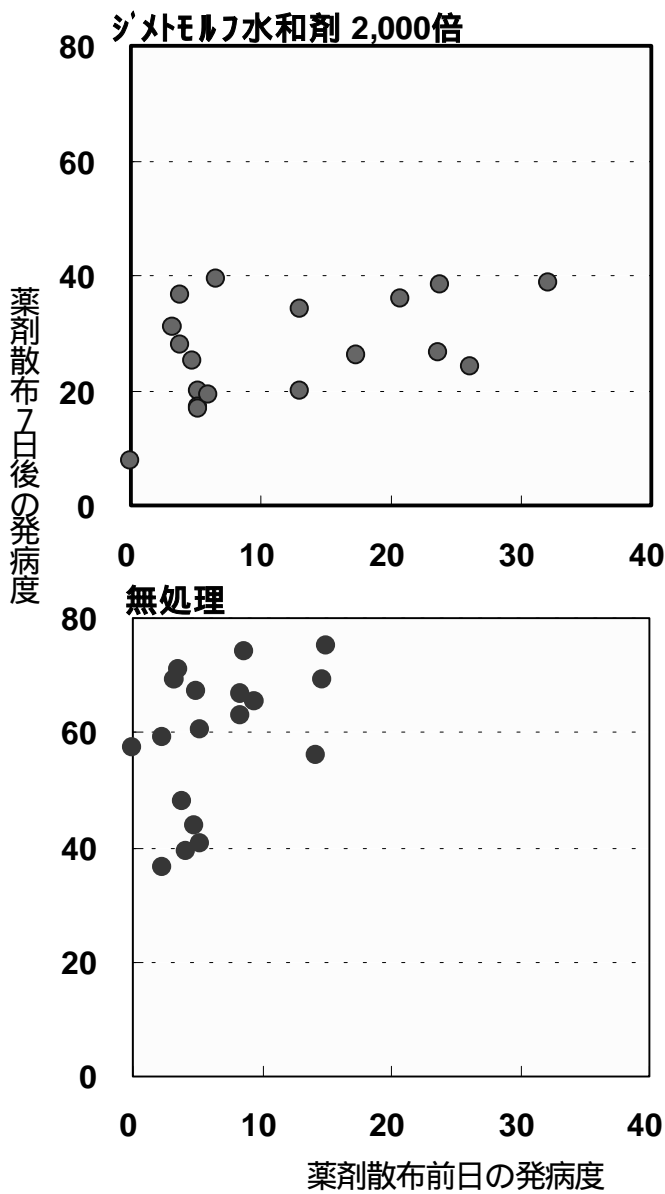


図1 キュウリベと病急増初期における病勢進展阻止効果 (2001年)

品種:南極1号(白根)  
 薬剤散布: 7月17日(急増初期)  
 横軸:薬剤散布前日の発病度(7/16)  
 縦軸:薬剤散布7日後の発病度(7/24)  

$$\text{発病度} = (4A+3B+2C+D) \times 100 \div (4 \times \text{調査葉数})$$
  
 A:葉の全面に発病~黄化 / B:葉面の2/3以上に発病 / C:葉面の1/3~2/3に発病 / D:葉面の1/3以下に発病 / E:発病が見られない

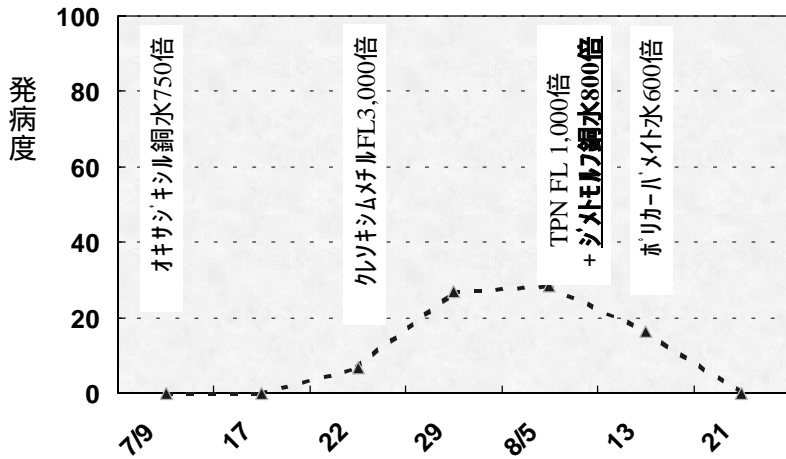


図2 体系防除においてジメトモルフ剤を加用した場合の病勢進展阻止効果 (2002年)  
 品種:南極1号(白根)  
 2002年のべと病病勢進展は緩慢であったため、処理時期をずらした。